

ならば母と私

やまだようこ

1 花園のなかの母と私

不幸せの風景は個性的でいろいろだが、幸せの風景はどれもよく似ているといわれる。ほんとうにそうかもしれない。

ポジティブで好ましい理想の母子関係として圧倒的に多く描かれたのは、「ならば母と私」の構図であった。それは日本の学生の絵でも、文化比較研究のために集めたアメリカの学生の絵でも、そして幼いときの絵でも、現在や未来の絵でも、細かいニュアンスのちがいを除けば同様であった。

ならば母と私の構図では、図1や図2の「花園のなか

の母と私」のように、ふたりが寄り添って、同じ風景を見ていたり、並んで仲良く同じことをしている姿が強調されている。ふたりは、共に同じ場所にいるが、それは花が咲き乱れた美しく明るい満ちたりた場所として描かれている。

壇一雄の小説「照る日の庭」には、次のような歌がくりかえし登場する。その歌がかかれた写真を友にたくす航空大尉はすでに、恋人からはるか離れた戦場にきており、もう二度とあのまぶしいばかりの照る日の庭に恋人と共に立つことができない自分の運命を知っている。

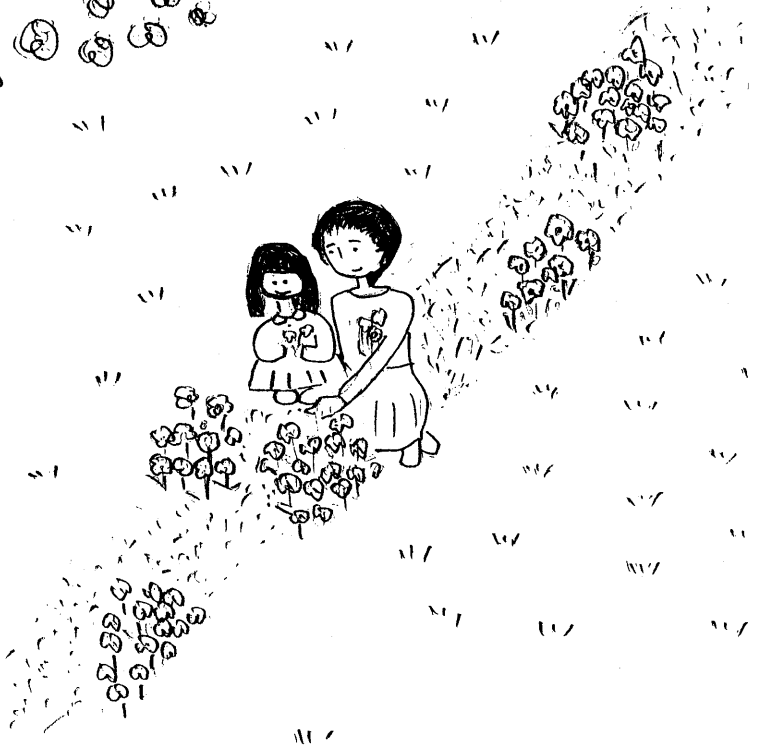
妹とふたり 心に触れて 語り合ひし

広い花園を二人で
歩いている。

◀ 図1 並んで花園を歩く母と私



▼ 図2 並んで花をつむ母と私



よく、家の近くや祖母の家の近くを散歩しました。れんげ畑で遊んだり、つくしをとりに行ったり、めだかやどじょうをとったりしたことを、とてもよくおぼえています。

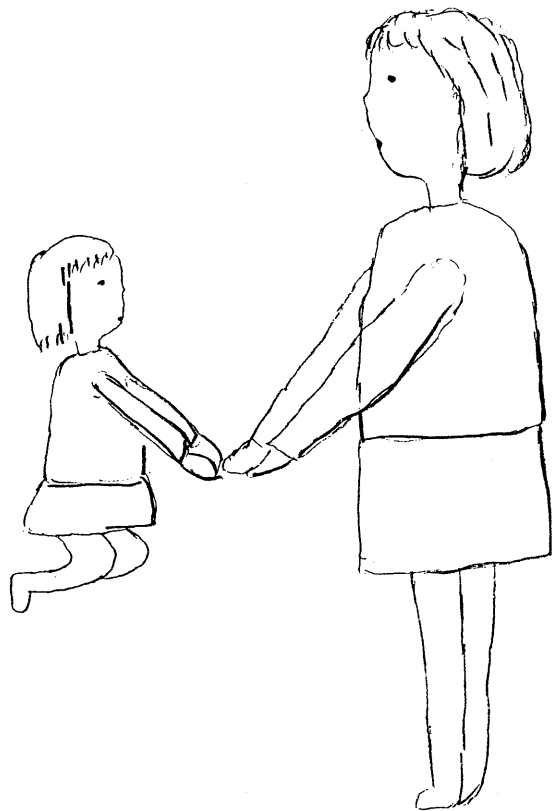
照る日の庭の 忘れえなくに

たとえ思い出の中できえ、ふたりが同じ場所であり
そって歩いた「花園」や「照る日の庭」の風景をもつこ
とができる人は幸せであろう。

2 「ならば」と「むきあう」

母と子が対面姿勢で向きあっている
構図、図3や図4のような「むきあう
母と私」の絵は、ならば絵とよく似て
おり、これもまた理想的な関係のよう
に見えるのだが、この構図を描いた人
は、日本ではきわめて少数派であっ
た。

日本映画では、たとえふたりがお見
合いのように向きあっても、重要
な場面になると、ひとりか席を立て
花や月を眺めはじめる。すると、いつ
のまにかもうひとりが傍らに寄りそ



▲図3 向きあう母と私

小さいころは、いろんな出来事をきいてもらいたくて、「おか
あさん、おかあさん」とよく手をひっぱっている話した。

幼稚園でのでき事をよく話した。

▼ 図 4 向きあって話す母と私



い、同じ風景を眺めはじめ、ふたりが並んだ関係になったところで重要な告白がなされることが多いという。

大伴旅人は妻の死を「ふたり並びいる」ことができなくなった悲しみとしてとらえた。それはまた、かつては一緒に眺めた「あふちの花」を共に見る事ができなくなった嘆きでもあった。

恨めしき 妹の命の 我をほも い
かにせよとか には鳥の 二人並び
居 語らひし 心をむきて 家さか
ります

(万葉集 七九四)

(うらめしい妻よ、私をどうせよ
というのか、カイツブリのよう
に、ふたりが並んで語りあったのに、ひとりだけ
そむいて、離れて逝ってしまうなんて)

妹が見し 棟の花は 散りぬべし 我が泣く涙 いま

だ干なくに

(万葉集 七九八)

(妻が見た、センダンの花は散ってしまうだろう。

私の泣く涙はまだ乾かないのに)

親子の対話が必要だとよく言われるが、私たちはふたりが正面向いて意見をたたかわず関係をもつことは得意ではなく、本当は対話などあまり望んでいないのかもしれない

れない。並んで同じものを眺める関係は、対話とはちがって、ふたりが傍らに寄り添って身を触れながら共鳴しあうコミュニケーションである。

もちろん同じ場所で二人が並んで見るのは「花園」や「照る日の庭」だけではないかもしれない。「同じ河原の枯れすすき」が飯屋のカウンターに並んで座って、「どうせ二人はこの世では花が咲かない」と一緒に歌う

◀ 図5 同じ比重の母と私



天びんデス

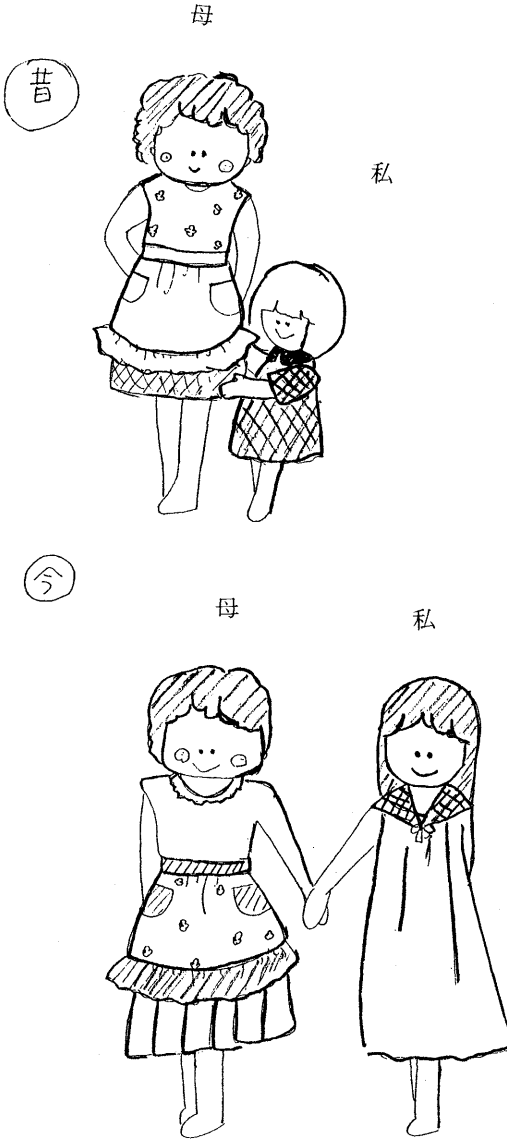
母と私、親子というよりは、姉妹。そして、どちらかと言えば、私が姉で、母が妹のようでも、こういう関係になったのは、中学生後半くらいからのデス。今は最高におもしろい親子。そして本当にすばらしいFamilyみんながすべて同等の立場レース

ような並ぶ関係の構図も、おなじみのものである。

3 同等のふたり

並ぶ関係が描かれるときには、図5、図6のように、ふたりが同等・対等であるという意味が暗黙のうちに含まれているようである。

図5のように、わざわざ体重計の上ののっけて、ふたりの重さが同じであることが強調されている場合もある。そして図6にみられるように、同等・対等であるという関係は、幼いときに見かけ上、多少の身体の大小があっても、本質的な関係はちっとも変わらないといえるだろう。



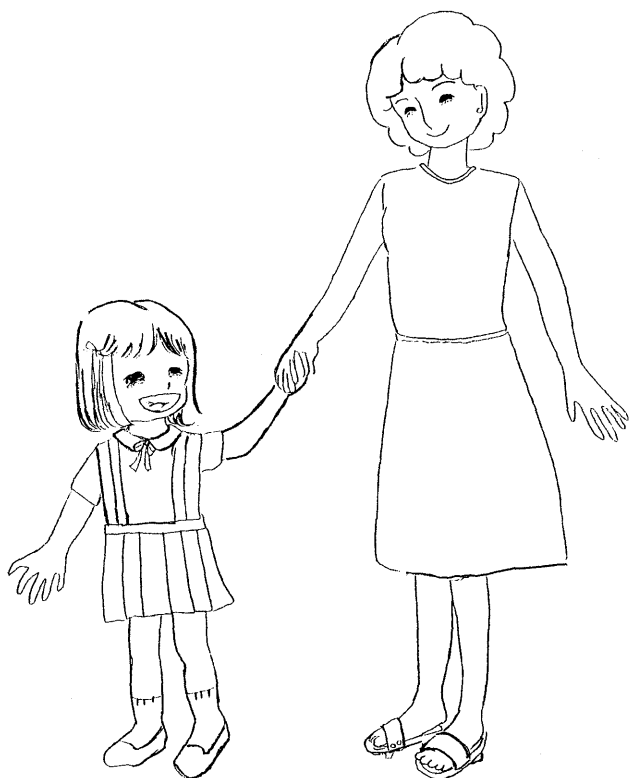
▲ 図6 幼時も今も並ぶ母と私

このような関係は、親子というよりは、友達だろうか、姉妹のような関係といたらよいだろうか。

並ぶ関係では母は、子どもの上でも下に位置するのではなく、子どもと同じ地平線上に立っている。母は、太陽や雷や大地や海のような自然に変身して、子どもとは比べものにならないほど大きく、強い特別の力や権威をもつことはない。母は、子どもと同じような平凡な容姿の人間として並んでいる。

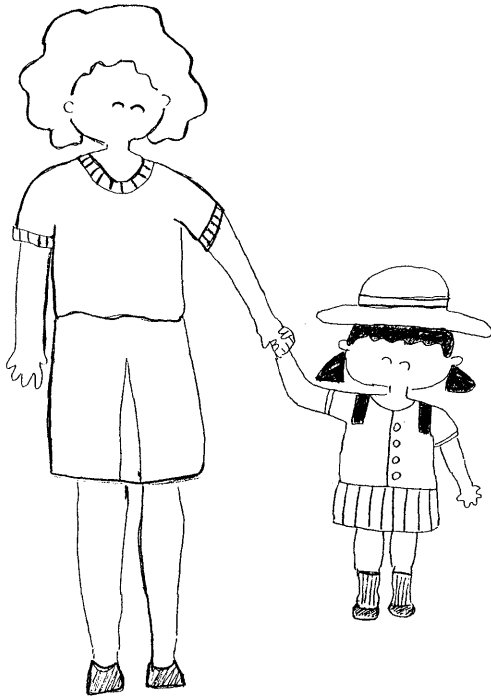
4 手をつなぐ

並ぶ関係のふたりは、手をつないでいることがたいへん多い。私たちは人と関係をむすんだり助けあったり仲良くなることを「手をつなぐ」「手を組む」「手をむすぶ」「手をとる」あり「手をにぎる」などというが、このような動作には象徴的な意味が含まれているのだろう。



保育園からいっしょに帰るところ。
髪はいつもお母さんに結んでもらった。

◀ 図7 手をつないで笑う母と私



▲図8 手をつないで笑う母と私

幼稚園の行き帰り、お母さんに手をひかれて通いました。

歩くのでも、眺めるのでも、食事や菓子を食べるのでも、作業や仕事をすることも、ひとりでやるのではなく、ふたりで共に同じことをやる時、連帯感が高まる。コミュニケーション

5 共にする

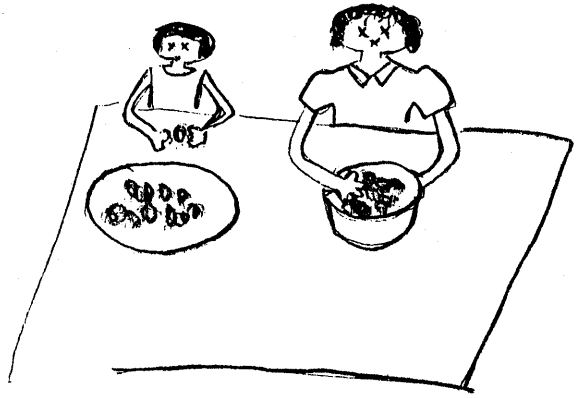
図9、図10のように、並んで料理をしたり、並んで眠ったり、ふたりが同じことを一緒にするという絵もよくみられたものである。

たりは、離ればなれでもない。手をつなぐことによって親密な関係をむすぶことに成功し、コミュニケーション・ルートを確保しているからである。

手をつないでいるふたりは、図7、図8のように、楽しそうな笑顔で描かれていることが多い。「おててつないで、野道を行けば」という行為は、双方に満足感をもたらすようである。

「手をつなぐ」のは、相互的な行為である。「手を出す」「手をとる」のは一方的でもできるが、つなぐためには、相手も自分も手を出さないといけない。相思相愛でお互いにその気がなければ難しいだろう。

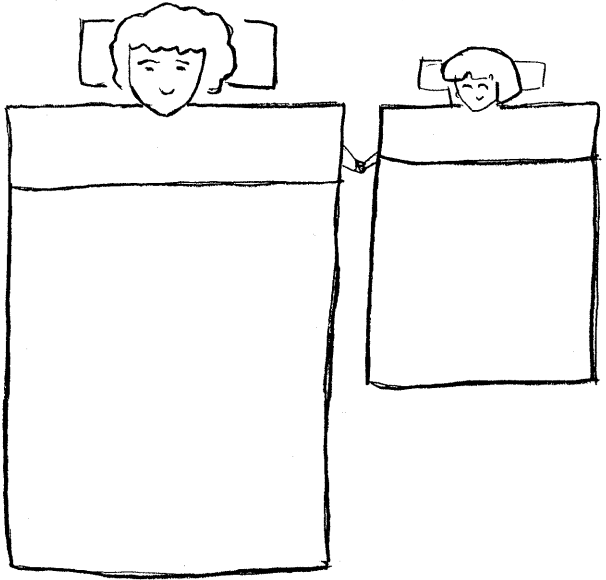
並ぶ関係のふたりは、包まれたり、融合したり、くっついていて関係とは違って、適度に離れている。だがふ



▶ 図9 並んで料理する母と私

小さい時はお手伝いが大好きだった。おやつはほとんど手作り
 でおいしかった。右の絵は一緒におはきを作っているところ
 ケーションということばは、もともとコモン（共通の・
 共同の）という意味のラテン語からきている。
 人と人とが気持ちを通じあうということは、並ぶ関係を

▼ 図10 並んで眠る母と私



つくることによって、共同で共通のものをつくりあげる
 ことである。それは人間の本来的な喜びに根ざしている
 のであろう。

上の絵は、いつもねる時に手をつないでいた時のこと。私がひ
 きつけをおこした時に、お母さんが私をだきしめてくれて、そ
 の時お母さんが着物をきていて、そのかっぽう着のにおいがわ
 ずれられない。

—— おわり ——

（愛知淑徳大学）